

[B年] 聖霊降臨節第15主日(2022年9月11日)**【旧約聖書日課】 ホセア書11章1～9節**

- 1 まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。
エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
- 2 わたしが彼らを呼び出したのに
彼らはわたしから去って行き
バアルに犠牲をささげ
偶像に香をたいた。
- 3 エフライムの腕を支えて
歩くことを教えたのは、わたしだ。
しかし、わたしが彼らをいやしたことを
彼らは知らなかった。
- 4 わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き
彼らの顎から軛を取り去り
身をかがめて食べさせた。
- 5 彼らはエジプトの地に帰ることもできず
アッシリアが彼らの王となる。
彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
- 6 剣は町々で荒れ狂い、たわ言を言う者を断ち
たくらみのゆえに滅ぼす。
- 7 わが民はかたくなにわたしに背いている。
たとえ彼らが天に向かって叫んでも
助け起こされることは決してない。
- 8 ああ、エフライムよ
お前を見捨てることができようか。
イスラエルよ
お前を引き渡すことができようか。
アダムのようにお前を見捨て
ツェボイムのようにすることができようか。
わたしは激しく心を動かされ
憐れみに胸を焼かれる。
- 9 わたしは、もはや怒りに燃えることなく
エフライムを再び滅ぼすことはしない。
わたしは神であり、人間ではない。
お前たちのうちにあつて聖なる者。
怒りをもって臨みはしない。

【使徒書日課】 コリントの信徒への手紙一**12章27節～13章13節**

12 ²⁷あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。²⁸神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。²⁹皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。³⁰皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言

を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。³¹あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

13 ¹たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。²たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。³全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

⁴愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。⁶不義を喜ばず、真実を喜ぶ。⁷すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

⁸愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、⁹わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。¹⁰完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。¹¹幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。¹²わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。¹³それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

【福音書日課】 マルコによる福音書12章28～34節

²⁸彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」²⁹イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。』³⁰心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』³¹第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」³²律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。³³そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」³⁴イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ホセア書11章1～9節

- 1 まだ幼かったイスラエルを私は愛した。
私はエジプトから私の子を呼び出した。
- 2 しかし、私が「底本→彼らが」彼らと呼んだのに
彼らは私から「底本→彼らの前から」去って行き
バアルにいけにえを献げ
偶像に香をたいた。
- 3 エフライムの腕を支え
歩くことを教えたのは私だ。
しかし、私に癒されたことに
彼らは気付かなかった。
- 4 私は人を結ぶ綱、愛の絆で彼らを導き
彼らの顎から轡を外す者のようになり
身をかがめて食べ物を与えた。
- 5 彼がエジプトの地に帰ることはなく
アッシリアが彼らの王となる。
彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
- 6 剣は町で荒れ狂い
大言壮語する者を絶ち、彼らのたくらみを挫く。
- 7 わが民はかたくなに私に背いている。
彼らがいと高き者に向かって叫んでも
決して届かない。
- 8 エフライムよ
どうしてあなたを引き渡すことができようか。
イスラエルよ
どうしてあなたを明け渡すことができようか。
どうしてアダムのようにあなたを引き渡し
ツェボイムのように扱うことができようか。
私の心は激しく揺さぶられ
憐れみで胸が熱くなる。
- 9 私はもはや怒りを燃やさず
再びエフライムを滅ぼすことはない。
私は神であって、人ではない。
あなたのただ中であって聖なる者。
怒りをもって臨むことはない。

コリントの信徒への手紙一12章27節～13章13節

12 ²⁷あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です。²⁸神は、ご自身のために、教会の中でいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に癒しの賜物を持つ者、援助する者、管理する者〔直訳→舵取り〕、種々の異言を語る者などです。²⁹皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。皆が奇跡を行う者でしょうか。³⁰皆が癒しの賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。皆がそれ

を解き明かすでしょうか。³¹あなたがたは、もっと大きな賜物を熱心に求めなさい。

そこで、私は、最も優れた道をあなたがたに示します。
13 ¹たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私は騒がしいどら、やかましいシンバル。²たとえ私が、預言する力を持ち、あらゆる秘義〔→神秘〕とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどの信仰を持っていても、愛がなければ、無に等しい。³また、全財産を人に分け与えても、焼かれるために〔異本→誇るために〕わが身を引き渡しても、愛がなければ、私に何の益もない。

⁴愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない〔別訳→思わない〕。⁶不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ。⁷すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

⁸愛は決して滅びません。しかし、預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れます。⁹私たちの知識は一部分であり、預言も一部分だからです。¹⁰完全なものが来たときには、部分的なものは廃れます。¹¹幼子だったとき、私は幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていました。大人になったとき、幼子のような在り方はやめました。¹²私たちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ているですが、その時には、顔と顔とを合わせて見ることになります。私は、今は一部しか知りませんが、その時には、私が神に〔原本にはない補足〕はっきり知られているように、はっきり知ることになります。¹³それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残ります。その中で最も大いなるものは、愛です。

マルコによる福音書12章28～34節

²⁸彼らの議論を聞いていた律法学者の一人が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる戒めのうちで、どれが第一でしょうか。」²⁹イエスはお答えになった。「第一の戒めは、これである。『聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は、唯一の主である。』³⁰心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』³¹第二の戒めはこれである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる戒めはほかにない。』³²律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない。』と言われたのは、本当です。』³³そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くすいけにえや供え物よりも優れています。」³⁴イエスはこの律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・9月11日「聖霊降臨節第15主日」の日課主題は「最高の道」。

・旧約聖書日課は、「ホセア書」から、神がイスラエルへの愛を一人称で歌う預言の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、「キリストの体=教会論」から展開して「愛の讃歌」と呼ばれる箇所まで。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスが「最も重要な掟」として教えられた逸話箇所。

旧約日課(ホセア 11章より)

・「ホセア書」は、ユダヤ正典「後の預言者」中、「十二小預言者」の最初に置かれている預言書。前8世紀、南王国で宮廷預言者として活動したイザヤとほぼ同時期に、北王国の宮廷預言者として活動した預言者ホセアの預言の書。預言者ホセアは、北王国イエフ王朝ヤロブアム王(在位=前786~746年ごろ)のもとで宮廷預言者として活動していたと考えられるが(ホセア 1:1)、ヤロブアム王没後の北王国内の政変を逃れて南王国に亡命し、受け入れられて南王国でも歴代王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの各王)のもとで宮廷預言者としての地位を与えられたものと推認される。ヤロブアム王没後、北王国がアッシリアによって滅亡(前722年ごろ)するまでの時期は、南北両王国は激しく対立しており(イザヤ 7章など参照)、南王国宮廷は、北王国からの亡命者を積極的に受け入れ、情報収集を図ったものと考えられる。「アモス書」の預言者アモスも、同様に北王国から南王国に亡命した預言者と推認されるが、「アモス書」からは、アモスが南王国で宮廷預言者として仕えたと推認する材料は見当たらない。また、「ヨナ書」の預言者ヨナも、北王国ヤロブアム王に仕える宮廷預言者であったと考えられるが(王下 14:25)、「ヨナ書」の物語が歴史的預言者ヨナに帰されるものであるかどうかは、その文学形式の特異性からも疑問が残る。いずれにしても、北王国イエフ王朝宮廷で仕えていた多くの者が王国滅亡期に南王国に亡命したことは確実であるが、預言者ホセアは、「ホセア書」の扱われ方などから、北王国からの亡命預言者の筆頭格であったものと推認される。

・「ホセア書」は、1~3章を中心に、預言者の自叙伝的預言の句が続くが、これが、預言者自身の実体験を語るものであるのか、創作の寓喩的預言として語られているものであるのかは、判然としない。「イザヤ書」(第一イザヤ)、「エレミヤ書」、「エゼキエル書」にも自叙伝的預言が見られるが、これらの預言者の場合は、その職務に直接関わる出来事として自叙伝的物語が置かれている。「ホセア書」の場合は、むしろ、「ヨナ書」のそれに近く、預言者自身を主人公とする創作的な寓喩預言という預言形式を想定することもできる。

・日課箇所を含め、「ホセア書」は、基本的に北王国イスラエルに関する預言であるが、預言者ホセアが南王国へ亡命後に告げた預言も含まれると考えられる。

・日課箇所冒頭(1節)の「愛した」はヘブライ語「ア-ハブ」の訳で、「ホセア書」では「愛する/愛人/慕い求める/好む」等の訳で15例が見られる。ヘブライ語「ヘセド」も、「愛/慈しみ」の訳で6例ある。両語には、「情愛」と「慈愛」として区別されるような質的相違がある。

・「エフライム」は、北王国イスラエルの中心に位置する部族名で、「旧約」中では「マナセ」と共に「ヨセフ族」としても扱われる。「ヨセフ族」は、「ベニヤミン族」と近い関係にあり、この両部族を中心にサウル(=ベニヤミン族出身)から始まる北王国が形成された。「ヨセフ族」と「ベニヤミン族」、また「ユダ族」との関係性は、「創世記」37章以下の「ヨセフ物語」で示唆されている。

使徒書日課(Ⅰコリント 12~13章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡」中「四大書簡」と呼ばれるものの一つで、使徒パウロが自ら創設に関わった「コリントの教会共同体」に宛てて記された書簡。コリントの教会共同体は、使徒パウロがコリント滞在中に、ローマから一時的に移住してきていたユダヤ人夫妻アキラとプリスキラの協力のもとで創設されたこととされるが(使徒 18章)、この夫妻はほぼ確実に、すでにシリア州アンティオキアの教会共同体と同様に成立していたローマの教会共同体に属する「キリスト信者」であったと考えられ、パウロがコリントを離れると、ローマの教会共同体(すなわち使徒ペトロ=ケファ)からの影響を強く受けたと推認される。パウロは本書簡で、コリントの教会共同体内に、指導者を巡って党派的対立が生じていたことを明示しているが(Ⅰコリ 1:12など)、アレクサンドリア(エジプト)の教会共同体出身と推認されるアポロの影響が大きかったことを特に示唆している(3章)。おそらく、ペトロの指導者としての影響については、パウロにも異論がなかったため、特筆していないのだろう。

・本書簡でパウロは、コリントの教会共同体内の「パウロ派」の信者から受けた相談に応じて、教会共同体で起こっていた諸問題についての助言を与えようとしている。具体的な問題への助言を経て、11~14章では、「神の教会」としてのあり方を基礎づける考えを提示している。

・日課箇所の前半(12章)は、「聖霊の賜物」論に基づいた「有機体=教会」論を提示した延長線で、「洗礼=聖霊授与」(12:13)に基づいた「キリストの体=教会」論を展開している。後半(13章)は、この「キリストの体=教会」論を基礎づける原則(「もっと大きな賜物」、「最高の道」)として「愛」が示されている。

・「キリストの体=教会」論は、他の「パウロ書簡」にも見られる(エフェソ 1:23、コロサイ 1:24など)。しかし、日課箇所では「有機体=教会」論の展開として論じられている点に特徴があり、焦点は具体的な地域共同体としての「教会」に置かれている。他方、エフェソ書等では、より抽象化された普遍的「教会」に視座がある。

・13章は「愛の讃歌」と呼ばれ、すでに教会共同体で共有されていた讃歌をパウロが引用して用いているのではないかと考えられているが、定かではない。

・13:12で繰り返される「そのときには」は、終末的信仰に基づく表現と解されることもあるが、文脈的には、11節の「成人した今」を指して言われている。すなわち、信仰の「幼子」状態から「成人」した信仰へと成熟していく「最高の道」として「愛」の実践に励み、その道の到達として「もっと大きな賜物」を受けようになったときには、という意味で「そのときには」と言われている。このように、「愛」の実践は信仰生活で一定の完成を体感できるものとして考えられているからこそ、13節で「いつまでも残る」という終末的信仰に依拠した「信仰と希望と愛」の中で、「愛」が「最も大なるもの」と言われうるのであろう。

福音書日課(マルコ 12章より)

・日課箇所は、「最も重要な掟」として申命記 6:4 とレビ記 19:18 を引用して教えられた逸話伝承を伝えており、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で共通しているが、「ルカ福音書」は異なる文脈で伝えている。

・「神への愛」と「隣人愛」を「律法」の最も重要な教えとして説いたのは、主イエスが初めてではない。ファリサイ派の主流を成していた「ヒレル派」律法学者の祖、ラビ・ヒレルが前1世紀にすでにこれを教えていたことが知られている。ラビ・ヒレルは、律法の形骸化を批判して、この教えを説いたと言われている。主イエスの教えの多くは、この「ヒレル派」の教説と一致するとされ、主イエスの教えと実践は、この「ヒレル主義」を再認、徹底しようとしたものとも考えられている。つまり、主イエスの時代の「ファリサイ派の人々」が、ラビ・ヒレルの教説にもかかわらず形骸化した律法の運用に甘んじていたことに対して、「ファリサイ派」に近い(あるいは、そのものの)立場で(内輪を)批判したからこそ、激しい対立(近親憎悪!)が生じたのであろう。そうであればこそ、日課箇所では、32節以下に「律法学者」が主イエスの教えに完全に同意し、主イエスもそれを認めていたというやり取りが逸話として置かれているのであろう。(このやり取りの逸話を、「マタイ」は伝えておらず、「ルカ」は異なるやり取りとして伝えている。「マタイ」は、当時のユダヤ教における「律法学者」の伝統や事情について熟知していたと考えられ、このやり取りを無用な付け足しと考えたのだらう。「ルカ」は、主イエスがある種の「産婆術」をもって質問した当人自身に主体的に答えさせる形式で描いている)。

・「マルコ福音書」では、日課箇所のほかで「愛(アガパオー/アガペートス)」の用語をもって教えられたことを伝える箇所はなく、ただ「愛する子(息子)」という表現が見られるのみである(1:11、9:7、12:6。ただし10:21「慈しんで」は原語「アガパオー」で訳せば「愛して」。旧約ヘブライ語の「へセド」は「愛」または「慈しみ」と訳される)。

来週の誕生日(9月11日~17日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-6番「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと17世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讃美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。
- ・21-487番「イエス、イエス」は、20世紀スコットランド教会で按手を受けアフリカ宣教に従事した宣教師T.S.コルヴァンが現地信徒ら自身に伝統音楽に基づいて創作させた讃美歌集『Fill Us With Your Love』に収録された讃美歌の一つ。「主の洗足」の記事に基づいて主の愛に従う道を歌う。
- ・21-429番「世界のどこかで」は、教団讃美歌委員会の「新しい讃美歌募集」(1989~95年)に公募された深沢秋子の作詞に高浪晋一が作曲。深沢秋子は、中学校の英語教師。

21-6「つくりぬしを賛美します」

Wilt heden nu treden voor God den Heere

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.
2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, waket en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot versterking, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!

English version by J.C. Cory

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.

21-487「イエス、イエス」

Jesus, Jesus, Fill Us with Your Love

Refrain: Jesu, Jesu, fill us with your love, / show us how to serve / the neighbors we have from you.

1. Kneels at the feet of his friends, / Silently washes their feet, / Master who pours out himself for them.
2. Neighbors are wealthy and poor, / Varied in color and race, / Neighbors are nearby and far away.
3. These are the ones we should serve, / These are the ones we should love: / All these are neighbors to us and you.
4. Kneel at the feet of our friends, / Silently washing their feet: / This is the way we should live with you.